5.　接合のルーツ　「漆」・「アスファルト」を見る

-「発掘された日本列島　2001」展-
-日本の固有の「木の文化の加工技術」として-
ursib.htm

6.16.　本年も　「発掘された日本列島　2001」展が両国の東京博物館で開催中。
今年の目玉は出雲大社の古代中空にそびえる神殿心柱の発掘。 最近の古代遺跡発掘から、4 世紀卑弥呼の時代　すでに大和に巨大勢力があり、「九州・出雲・東海・越」など日本各地の土器などからこれらの地方が大和の勢力下にあったことが判ってきて、また、従来考えられていた縄文時代には考えられない巨木を加工した日本古来の「木の文化」の存在など古代史が書き換えられようとしている。
出雲大社の発掘から、古代中空にそびえる巨大神殿〔東大寺大仏殿よりも大きな高さ 46M を越える建物〕伝承を裏付ける巨大心柱が発掘された。
春　出雲太大社の本殿の前にある発掘中の「宇豆柱」を見ましたが、大きな柱が三本束ねられ、すごいと思いました。

天空にそびえる　古代　出雲大社　想像図　NHK TV より

発掘中の宇豆柱
三本の大木が一つの柱に組み立てられている

三内丸山遺跡をはじめとして、古代遺跡で次々に見つかる巨大木加工技術。
これらから、日本には世界 3 大文明に匹敵する「木の文明・文化」があったとする説を唱える人が多くなってきているが、大空高くそびえる出雲神殿の存在はますます日本固有の「木の文化」の実在に根拠を与えるものと思う。 ともすれば「日本の文化は渡来人によってもたらされた」とする日本古代史が今書き換えられようとしています。
　三本の大木を束ねた柱が幾本も天空高くそびえ　その柱の上　天空に大きな神殿がそびえている。
想像しただけでもびっくりする建造物
これが日本古来の文明がもたらした木の加工技術・ピラミッドに相当する文明の粋を集めた巨大木造建造物と言わずにおれようか・・・・・・

本当にビックリした。　春　出雲大社でこの宇豆柱の発掘を見たときにはすごい柱だとは思いましたが、天空にそびえる神殿のスケールの大きさを見て本当にびっくり。
　三内丸山の巨大な6本柱といい　その後の弥生時代の巨大柱を使用した幾多の建造物　そしてこの出雲大社の古代神殿。　日本の木の文化の素晴らしさが見えてくる。
そんな中で　古代の加工技術の基本となる接合と深くかかわっていた、縄文の「漆」と「アスファルト」が発掘展示されていた。
接合にたずさわるものの自負心かもしれないが、これらの加工技術が冶具・工具をつくり　きめの細かい加工を可能にし、その展開が日本の木の文化を大きく育てた事であろうことは想像できる。
北海道垣の島遺跡から縄文早期の最古の「赤漆製品」が発掘され、従来大陸から伝わったとされていた「漆」が日本固有の技術である可能性が強まった。 また、青森八戸の縄文遺跡からは「赤漆」により、接合補修された痕跡のある遮光器土土偶の首が発掘展示されており、古代の有力な接合・補修技術であることが判る。 きっちりと補修接合として漆が使われているのを見るのは初めてでした。
また、新潟の青田縄文遺跡で出土した「天然アスファルトの塊」が展示され、古代縄文のアスファルトの塊も見るのが初めて。 もう　数年にわたって　日本の接合・接着技術の原点として　「アスファルト」「漆」で設置・接合された物を見たくて色々博物館へ通いましたが　「アスファルト」につづいて「漆」でもが実際に使われた現物をやっと見ることが出来ました。

接合・接着のルーツ　赤漆・アスファルト　「発掘された日本列島　2001」展より

縄文の赤漆と天然アスファルト塊

赤漆での修復痕跡のある土偶

日本の古代の歴史が書き換えられようとしていますが、それと伴って　従来はあまり注目されていなかった「日本の木の文化」が世界文明の視点からも重要視されています。
日本固有の文化・技術と稲・鉄を中心とした大陸からの技術が融合し、日本が形作られた。
今、「古代鉄の流れ」からも不思議な事多く　ちょっとづつ　ベールが剥がされていくのが面白い。

たたら・和鉄探訪　COUNTRY WALK　　2001.7.1.　by M.Nakanishi